

すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮

周路 著 岩田温子 訳

第6回 名利を求めて

近年、高鳳蓮さんは、一層迫力のある、人の目を奪うような作品を発表し続けています。20枚の紅い紙で組み合わせた巨大な剪纸《黄河风情图》シリーズは彼女ならではの作品です。単純な図柄だった作品は、言葉による説明が必要な、スペクタクル的風景や叙事詩のような大きな作品に変わり、また、例えば《二十四孝*》のような文学性が強い題材も、あまり内容を把握しないままにさかんに取り上げるようになってきました。そのため作品は典型的になり、図解式の画面が度々あらわれるようになりました。

一連の作品の中で比較的目立つ作品は《梁山伯と祝英台*》です。これは全紙大の2枚の紅い紙を使った作品で、目が眩むほど華やかなものですが、主と従の区別が無く、人物は重複しています。しかし、高鳳蓮さん本人の説明を聞けば、かえって面白みが感じられ、完全に黄土高原版《梁祝》といえます。

*「二十四孝」 中国において後世の模範として、孝行が特に優れた人物の故事を集めたもの。「孝」は儒教の倫理思想の核心として長い間、中国社会で家庭関係を維持するための道德基準であった。

*「梁山伯と祝英台」 中国東晋時代の悲恋の物語。中国版のロメオとジュリエットともいわれる。

このほかにいくつかの大型の剪纸作品、例えば《陕北风情图》、《黄河人家》などは画面が煩雑で、人物は類型化し、意余って力足らずの感じがあります。作品はすでに完全に窓花(窓の装飾として剪られた剪纸)の範疇から脱却し、作品に込められた情報も多くなり、画面を理解するには言葉による説明に頼らざるを得なくなってきました。

こうなると文字を知らない高鳳蓮さんにとって、これらの作品の制作はかなり苦勞の多いものだったろうと想像できますし、彼女自身も“この仕事は本当に頭が痛かった”と認めています。高鳳蓮さんは剪纸への激しい情熱と制作にあたってのインスピレーションがすでに弱まってきていて、言葉でどのように説明ができるかということに専念するようになってしまいました。その上、民間芸術の剪纸分野でのリーダー的地位を固めることに腐心し、剪纸への情熱を計る天秤は栄誉と名声、さらに経済的な利益を求めの方へと傾き始めたのです。

実は、剪纸芸術は山の上に咲く花が季節が来れば咲き



梁山伯と祝英台 近期

そしてしぼむようなもので、人が自らの興味に従って剪り、自らが楽しむものです。雨が十分に降り、太陽の光を充分浴びれば、花は美しく咲きます。しかし、雨が多すぎ、激しい陽光にさらされれば、萎み、散ってしまいます。民間の間で剪られてきた剪紙も同じことなのです。

2001年から2003年の2年間、私は延川県文化局で働きました。1～2ヶ月に一度は高鳳蓮さんを訪ねましたが、剪紙については触れず、ただ、農作物の出来具合や、家庭のこと、子供たちのこと、仕事のことなどを話しました。

そのときの高鳳蓮さんと私の対話はこんな具合でした。

「あなたはここ数年、ずっとこの山の中を駆け回っているけれど、家のことはほったらかしているのかね？」

「いいや、妻も私も、もうお互いに歳をとってるもの。妻も娘も私がないのには慣れっこになっているし、娘は小さいときから父親は家にいないもんだと分かっているみたいだね。」

「娘が一人だけなんて本当に侘しいもんだ。奥さんを連れてきて、ここで子供を生みなさい。私が育ててやるよ。」

「ああ、それは好いねえ。」

またある時、高鳳蓮さんはとても真剣に私に向かって訊いてきました。

「あんた達のような人は世の中のことをよく知っているだろうけど、中央テレビ局が毎日私を放映しているね。お金を請求できると思うかい？」

これは誰かが高鳳蓮さんをそそのかしたに違いありません。彼女が言うのは、毎日午前8時半に中央テレビ局が放映する“紅い夕陽”という番組のタイトルの中で彼女が剪紙を作るシーンを指しています。

私は「番組制作のことは良く知らないし、高鳳蓮さんはもう剪紙の名人で、誰にでも知られた公の人なから、



大作に挑む高鳳蓮さん

お金は要求しないほうがいいでしょう」と答えました。しかし、こんな通り一遍の言い方ではもう彼女を満足させることはできませんでした。

2003年5月、私は延川県での2年に渡る仕事が間もなく終わるといふときに、高鳳蓮さんに別れを告げに訪れました。

丘の小道を手を取り合って歩いているときに、私たちは同時にお互いに長い間気にかけていたことを話し出しました。即ち、高鳳蓮さんは私が住んでいる都市で一度展覧会を開きたいと考えていること、そして、私も必ず早いうちにその展覧会を実現させる努力をすると答えました。



六駿図 90年代後期